

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：34417

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K11525

研究課題名(和文) キャリア中期ジェネラリスト看護師の、物語としてのキャリア創出に関する研究

研究課題名(英文) Study on Career Creation as a Narrative of Mid-Career Generalist Nurses

研究代表者

太田 祐子 (OTA, Yuko)

関西医科大学・看護学部・准教授

研究者番号：70349778

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)： キャリア中期ジェネラリスト看護師の、キャリアを語る当事者の会を開催した。参加者は【気後れする、とどまっている私】と自己評価が低かったが、《これでいいんだと再び思え(た)》【語りの中で看護と私が見えて(くる)】きた。中堅看護師として《みえてくる看護の質を異端者の立場で思いあぐねる》など【養われた鑑識眼が看護の質をあぶり出す】ことも語られた。働き方としては、【置かれた縁に身を任せる】、【働き続けるために、仕事の仕方を整える】の両方が語られた。個別のインタビューにおける語りを含めて、それぞれの看護職が自身の物語を描き、キャリアの見通しと意味づけを新たにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

キャリア中期ジェネラリスト看護師は、看護の最前線で実践する一方で特定の専門領域をもたず管理職に就かず「停滞」していると言われることもあった。しかし語りの場を得ると中堅看護師として養われた鑑識眼を伴う豊かな実践が表現され、看護実践やキャリアへの意味づけを新たにしモチベーションを得ていく契機となっており、こうした語りあい聴きあう場の重要性が示された。

中年期での加齢による体力の衰えが否めないなか、キャリア中期看護師が担う責任の増大や医療現場の重症化・入院日数の短縮化など看護の現場の負担が増し、家庭生活と仕事の両立が課題として改めて見出されるとともに、これへの対処を確認していく場ともなっていた。

研究成果の概要(英文)： The peer group which mid-career generalist nurses have narratives one's career each other were held. Although many participants had a low self-esteem, and told "I'm disappointed and confused", but they had reflection nursing and their career through the narratives, then, they felt "I think again it's OK."

Their developed connoisseurship as proficient concerned about the quality of nursing at their places, they felt "Suspecting the quality of nursing in a strange workplace practice". On the other hand, their working stance was "Leaving yourself to the edge where they are placed" and arrange the way of work to continue working.

By narrating their career story, including narrative in the interview after peer group, They have created their own story and renewed their career outlook and meaning.

研究分野：看護職キャリア発達

キーワード：キャリア ジェネラリスト 物語 ナラティブ 看護師 キャリア中期 ピアグループ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

キャリアという概念は多面性を持つ。Schein (1990/2003) は、職種や昇進、要請される具体的段階のような「外見上のキャリア」に対する「内面的な(本質的な)キャリア」の存在を指摘している。看護界では職業の経歴や、いわゆる「キャリア・アップ」など外見上のキャリアのイメージが根強くある。

内面的なキャリアに関する研究には、キャリアの構造や看護師としてのアイデンティティの獲得と自己実現への志向性 (Gregg & Magilvy, 2001; グレグ他, 2003) などが示されつつある。

キャリア中期看護師についてみると、組織はケアの担い手や後輩指導者として期待をかける反面、キャリアに関して自己任せが多く研究も少ない。しかしキャリア中期は中年期の危機の時期と重なり、女性ならではの複雑性があり (岡本, 2002) 支援の必要性が指摘されてきた。

このキャリア中期看護師の多くがジェネラリストである。ジェネラリストの研究はあまり見当たらないが、キャリア中期看護師のプラトーンといわれる状況を停滞と捉えた報告がある。

研究代表者の研究では、経験を丁寧に聴いていくと豊かな看護実践があるのに、本人はそこに意味づけができず自己評価を下げ、今後のキャリアの見通しが不透明で惑う状況があった。しかし研究を通したインタビューというナラティブな語りの場が、参加者それぞれの意味の発見につながっていた (太田, 2014a)。

一方でこれらは、研究者自らが参加者と丁寧に対話的な語りの場を運営することで協働的に創出して来たことである。こうした直接的な働きかけは量的に限界があり、多数のキャリア中期ジェネラリストに届きにくい現実がある。そこで本研究は、当事者同士が語り合うことで個々の物語およびキャリアの展望を見出すねらいの場を設け、その効果について検証を行うこととした。集団の中で対話的に語り合うことは、自分自身を見つめなおすリフレクションの力があり (太田, 2002b; 2002c; 2003; 2008) 新たな意味を付加した物語が創出されると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、キャリア中期のジェネラリスト看護師について、キャリア支援実践として、キャリアを語る当事者の会 = ピア・グループを開催し、内面的側面を含めた自己のキャリアを振り返り展望を持てる機会として、その効果を検証すること、語りを通して、研究参加者個々のキャリアの経験とその意味づけを、その人の物語として創出すること、また、それを継続的な語りにより描出することを目的として実施した。

### 3. 研究の方法

(1) 研究参加者：以下の条件で研究への参加に承諾が得られるものとした。

30~40歳代かつ看護師経験6年以上のもの

女性であり正規職員であるもの

専門看護師および認定看護師の資格をもたず、研究参加の時点でそれを明確に志向していない看護師

管理職を除く。

(2) 研究参加者へのアクセス方法と研究参加への承諾：以下のいずれかの方法でアプローチを行い自由意思による本人の承諾を得た。

研究者の知人を介して条件に合う人の紹介を得た。

ピア・グループ開催場所周辺で、研究参加者の条件に該当する人が比較的多いと思われる施設を抽出し、その看護部に依頼した。募集チラシと返信ハガキを設置または配付してもらい、研究に関心をもった本人自らによるハガキの投函から連絡先と説明機会を得た。

研究参加者となった者に、条件に該当する知人の心当たりがあれば紹介してもらった。

(3) データ収集期間：2017年3月~2019年3月

(4) データ収集方法：データ収集は以下の方法で行い、うち ~ をデータとした。

キャリア中期ジェネラリストのピア・グループ「私のキャリアを語り合う会」を開催し、現在に至るまでの自身のキャリアおよび看護実践について語り合う場とした。そこでは、参加者が互いに敬意を払うこと、安全が保証される場になるよう、参加者同士で確認しながら行った。

研究参加者に「個人年表」の記載を依頼した。

各会の経過をメモ、録音・逐語化した。

ピア・グループの参加者に終了後にアンケートの回答を求め郵送で回収した。

同意を得た研究参加者にピア・グループの経験および自身のキャリアについてナラティブ・インタビューを行い、メモ、録音・逐語化した。

(5) データ分析方法

データ収集 を用いて会の進行におけるキャリアに関する語りを相互作用に注意しながら抽出し、見出し・テーマをつけて質的帰納的に分析した。また のアンケートの記述内容、およびの参加者による事後の語りにおけるピア・グループの経験を抽出して補完した。また、データ収

集 で語られたキャリアとその意味を個々の物語として捉えた。

#### (6) 倫理的配慮

研究参加者の参加への自由意思、個人情報保護等に配慮し、東京工科大学倫理委員会の承認を得て行った(第 E-17HS-003 号、第 E-17HS-004 号)。

#### 4. 研究成果

ピア・グループ「私のキャリアを語り合う会」(会)への研究参加者は 11 名であり、各回 2~4 名の参加者と研究者 1~3 名により実施した。計 5 回行われた会の所要時間はそれぞれ約 1.5~2 時間であった。各回の参加者は不定でそれぞれ 1~4 回の参加であり、11 名中 9 名の参加者が 30 歳代であった。

計 5 回に渡る会で語られたキャリアに関する内容を文脈に沿って抽出し、質的帰納的に分析し、次の結果が得られた。以下、テーマを【 】、サブテーマを《 》、見出しを で示す。

参加者たちは、もともと【気後れする、とどまっている私】と、自己評価が低い者が少なくなかった。この先どうしようかと常に考える(る)ながら、《やりたいことは、まだ探している》たり、移るきっかけを逃しとどまってい(る)た。参加者によっては職場に同年代のジェネラリストが何人もいて 他にもいるので悪くない居心地 を得ていたが、年長で独特の立ち位置であり、他の参加者からは専門領域を極めようとする 熱い同僚に気後れ(する)して、「こんな私がここにいいのか」と自身が実践の場で胸を張ってられない心情が語られた。しかし中には、上司と話しているうちに指摘されるなど《やっと見えてきた、やりたい看護》を語る者もあった。また、 やっぱり患者さんが見てくれている や 小さな成功を、医師のフィードバックが支える など【承認されて、続けてこられた】ことが語られた。ただしこの承認は、上司や同僚によるものは積極的に語られなかった。参加者からは、普段職場の同僚間で 仕事の喜びは、嬉しくても言いづらい など、看護の仕事やその意味を語り合う機会を得られていないことが語られた。

会で《看護の手応えを言葉にする》までには、何度も尋ねられてやっと語りが始まったり、他者の語りを聴くうちに 今思い出した、自分がした「良い」看護 など、同じ立場の者同士が互いに真摯に聴き合う姿勢に促されていた。具体的には、飛び込んだ訪問看護で、「その人」と暮らしを知る楽しさ や 知恵を絞った入浴の実現の成功体験、経験値があったから踏み込んだ実践 などがあつて 信頼を得た手応えが、心に残(る)っていた。語り合い聞き合ううちに《忘れかけていた、看護での楽しい気持ちの呼び覚まし》が起こり、指摘されて心当たる、大切にしてきたこと など《「これでいいんだな」と再び思え(た)》てきていた。《他者の視点が世界を拓ける》ことも相まって、【語りの中で、看護と私が見えてくる】に至っていた。

一方、会では、キャリア中期の看護職として【養われた鑑識眼が、看護の質をあぶり出す】ことが語られていた。ほころびの見える看護の質にモヤモヤ(する)したり 移籍して見えてくる、組織の善し悪し、「アウェイ」の職場になじむことへの葛藤 が語られ、同僚や他部署、移籍先などで《看護の質を異端者の立場で思いあぐね(る)》ていたが 距離が遠く新人たちを憂慮(する)したり 私も職場でモヤモヤしている など、内部者になりきれない立場から、忌憚なく最善を追求するのに躊躇する状況が語られた。反面、新人を教える世代の感情的な厳しさを、かつての自分を重ねて憂う など、慚愧に堪えない自身のありようを重ね合わせたり、鑑識眼を持ちつつある 今なら新人のがんばりが理解できる ことや、困った新人の「弱み」を「強み」へと捉え直す ことなど、《寛容さが付加された新人への眼差し》が語られた。

特定のスペシャリストや管理職を志向していないキャリア中期ジェネラリスト看護職として、看護ができればどこでもよい、患者と直接関わる方が楽しい、呼ばれていきなり飛び込んだ訪問看護、ジェネラリストの需要があると師長から聞いた など【置かれた縁に身を任せ(る)】て来してきたことが語られた。

しかし《どどんきつくなる身体と環境》や、守備範囲が偏らないよう転職してきた、移籍の実際への関心、職場を動いた方が給料は上がる など、《攻めの転職を意識する》ことも語られた。一方、育児や結婚生活などキャリア中期のライフイベントのさなかであり、パートナー探しが優先課題、結婚したら仕事は少なく、と思いつく、やっぱり子育てと仕事を両立したい、育児の今は、時短で割り切る、生活があるので、仕事は割り切る など《家族がいるから、仕事時間に線を引く》ことも重要視しており、【働き続けるために、仕事の仕方を整える】あり方が語られた。

ピア・グループの事後に行われた個別のインタビューにおける語りを含めて、それぞれの看護職が自身の物語を描き、キャリアの見通しと意味づけを新たに示した。

キャリア中期ジェネラリスト看護師は、看護の最前線で実践する一方で特定の専門領域をもたず管理職に就かず、「停滞」していると言われることもあり、自己評価も低いことが語られた。しかし安全な語りのおよび聴く者の存在を得ると、これまでに中堅看護師として培われてきた鑑識眼によるものの見方を含めた豊かな実践が表現され、看護や自分自身のキャリアへの意味づけを新たにしたりモチベーションを得ていく契機となっていた。よって、こうした語りあい聴きあう場の重要性和有効性が示された。

ただし、この場における相互作用やダイナミクスがどのように動いているのか、この場の成立要件が何かなどの検討は未開発である。今後の課題としたい。

一方、加齢に伴い、体力の衰えが否めないが、看護師として職場での責任の増大や医療現場の重症化・入院日数の短縮化など現場の負担が増すなか、仕事を継続するための方法を試行錯誤しており、家庭生活と仕事の両立が課題として改めて見出された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 太田祐子
2. 発表標題 キャリア中期ジェネラリスト看護師が語る、仕事に対する捉え方の一考察 「キャリアを語る会」での発露とその様相
3. 学会等名 第50回 日本看護学会 看護管理 学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山口 みのり  (YAMAGUCHI Minori)  (00369480)	神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・講師    (22702)	
研究分担者	上山 千恵子  (KAMIYAMA Chieko)  (90751587)	関西医科大学・看護学部・研究員    (34417)	